

15世紀のメディチ家邸内における絵画 ——「祈念図像」から「美術品」へ——

Painting in the Palace of Medici in the 15th century: from the “devotional image” to the “work of Art”

出 佳奈子*

Kanako IDE*

要 旨

この論文は、15世紀に作成された四つのメディチ家の財産目録をもとに、この世紀を通じてフィレンツェ貴族の個人邸宅における美術作品の性質が、宗教的慣習に結びついた「祈念図像（devotional image）」から、展示や鑑賞の対象として意図された「美術品」へと移行していった可能性を検討しようとするものである。これらの財産目録における絵画作品についての記載方法、また、判別可能な場合にはそれらの部屋毎の配置の確認を通じて注目されるのは、15世紀の間に、メディチ家において所蔵されていた絵画作品の形態と主題が、典型的な宗教図像から多種多様なものに変化している点、またそれら多種多様な美術品が、各部屋にいわば混合された状態で配置されるようになっていった点である。ここでは、絵画作品を中心に、それらが15世紀を通じて、鑑賞・展示の対象としての役割を増大させていったと考えられることを指摘していく。

キーワード：絵画 メディチ家 15世紀 祈念図像 美術品 コレクション

本論文は、15世紀に作成された四つのメディチ家財産目録をもとに、この世紀を通じてフィレンツェ貴族の個人邸宅内に蒐集・設置された主に絵画作品の性質が、宗教的慣習に結びついた「祈念図像（devotional image）」から、展示や観賞の対象として意図された「美術品」へと移行した可能性を指摘しようとするものである。14世紀末以降、銀行業を拡大し莫大な富を築いたメディチ家は、15世紀のフィレンツェの町において、政治的にも絶大な権力を誇っていた。近年の美術史研究では、歴代のメディチ家の当主たちがこうした繁栄を背景に行った美術品制作の際のパトロネージの問題や、美術品の政治的利用、あるいは美術品蒐集家としての側面に注目するものが多い¹。ここでは、美術品蒐集家としてのメディチ家の役割に関する先行研究の状況²を踏まえた上で、これまであまり関心の払われてこなかったメディチ家の絵画コレクションに注目し、現存する当家の財産目録中の記載を検討しながら、これらの絵画がメディチ家の邸内においてどの

ような存在であったのかという点を、明らかにしていきたい。

1 15世紀メディチ家の財産目録と先行研究

ここでまず、15世紀に作成されたメディチ家の財産目録（inventario）について確認する。現存するメディチ本家の財産目録としては、1417年に作成されたコジモ・デ・メディチ（1389-1464）の父ジョヴァンニ・ディ・ピッチ（1360-1429）の財産目録、1456年にコジモの息子ピエロ（1416-69）が作成させた財産目録、1464年のコジモの死に際して作成された財産目録、そして、1492年のピエロの息子ロレンツォ（1449-92）の死に際して作成された財産目録の四点が挙げられる³。1417年作成の財産目録には、現存しない旧メディチ邸内にあった全ての家財道具が、部屋毎に、数量とともに簡潔に記載されている。次の1456年の財産目録でも、目録の作成を命じたピエロ・デ・メディ

*弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

チの家財道具についての記載が、部屋毎ではなくジャンル毎にはあるが、やはり簡潔な表現で行われている。なお、この目録の最後には、1463年の年記を伴う形で、家財道具に関する新たな記載が付け加えられている。一方、1465年のコジモの死に際して作成された財産目録は、息子ピエロが所有する様々な宝飾品、古代のメダルやカメオ、そして本などととも数点の美術品を列挙したものであり、家財道具をすべて網羅した通常の財産目録というよりは、いわゆるコレクション・アイテムについて記載した記録と捉えることができるだろう。また、以前に作成された二つの財産目録と比べて新しい点は、それぞれの物品に値段が付けられている点である。最後に挙げた1492年の財産目録に関しては、当初のものは存在せず、これを模写したとされる1512年の記録が残るのみであるが、1457年に完成したラルガ通りのメディチ邸（現メディチ・リッカルディ邸、図1）を含む彼が所有していた城館の家財道具が部屋毎に列挙されている。そこでは、それぞれの物品についての記述が、以前の財産目録の記述よりもいっそう詳細なものへと変化し、また1464年のピエロの財産目録と同様に、値段が付記されている。

メディチ邸内にあった美術品とメディチ家の当主たちに関するこれまでの研究には二つの傾向が認められる。一つは、美術のパトロンとしてのメディチ家の政治的意図に注目するものであり、こうした側面からの研究は、メディチ家の当主たちの中でも、とりわけコジモとピエロが関係した作品を扱ったものに多い。例としては、現メディチ・リッカルディ邸において1450-55年にかけて建設された礼拝堂内に、1459年にコジモの注文によって描かれたベノッツォ・ゴッツォリによる壁画《マギ（東方三博士）の旅》に関するものや、同じ邸内の二階にある「大広間」を飾っていたポツライウオーロ兄弟による「ヘラクレスの偉業」をテーマとする絵画群に注目したものが挙げられる。アッチディーニ・ルキナトやケントは、《マギの旅》の壁画について、これが当時フィレンツェの町でメディチ家が活動の指揮を執っていた「マギ同信会」に言及するものである一方で、東方三博士とメディチ家の歴代当主の顔を一致させることによって、メディチ家の権勢を内外に知らしめる役割を担っていたと解釈している⁴。また、「ヘラクレスの偉業」を描いていた絵画群については、その図像プログラムに、作品の注文主と考えられるコジモあるいはピエロ・デ・メディチがフィレンツェ共和国に対して発していた政治的且つ道徳的なメッセージを読解したデル・ブラー

ヴォやブルストによる研究が挙げられる⁵。

もう一つの研究傾向は、メディチ家当主たちの美術品蒐集家としての側面に注目するものであり、こうした観点からの研究は、ロレンツォに関するものが多い。とりわけ近年発表されたフスコおよびコルティ、またフルトンによる研究は、古代美術蒐集家としてのロレンツォの好みや、蒐集された古代美術の美的・政治的役割、更には、同時代の美術家に対する教育的利用について論じている点で興味深い⁶。しかしながら、このような傾向を持つ研究では、ロレンツォがメディチ邸二階の「書齋 (scrittoio)」と呼ばれる部屋に集めた、カメオやメダルを中心とする古代遺物や高価な宝飾品の類、また、同じ邸の裏庭に集められていたとされる古代彫刻のコレクションばかりに注目が集まり、「書齋」のみならず邸内の様々な部屋に散見される絵画作品について、それが邸内でどのような役割を担っていたかについて論じるものは少ない。確かに、こうした絵画群に注目した研究として、1492年の財産目録に記載された絵画を現存する作品と比較しながら確認したダル・ポッジェットによる先駆的研究や、前述の「大広間」と一階にあった「ロレンツォの部屋」に集められた絵画群の図像プログラムをセネカの著作と関連付けて解釈したデル・ブラーヴォによる研究を挙げることができるが、いずれも、これらの絵画群が邸内においてどのように享受されていたのかを具体的に検討しようとするものではない⁷。更にまた、1492年以前に作成された三つの財産目録に登場する数少ない絵画と1492年の時点では邸内の至る場所に設置されていた絵画群とを相互に比較し、邸内におけるそれらの絵画が宗教的な役割を担うものから観賞の対象へと変化していることが議論の対象となることもなかった。

以上の点を踏まえ、ここから、各財産目録における絵画作品の記載表現とそれらの設置場所とを具体的に確認しながら、15世紀の一世紀間を通じて、そうした絵画に接する人々の行為に、宗教的な行いから芸術作品の享受への変化が見られることを指摘していきたい。

2 1417年の財産目録における絵画について

まず、コジモの父ジョヴァンニが没した1417年作成の財産目録における絵画に相当する作品の記述から検討する。この財産目録に記載されている絵画・彫刻作品は、数ある家財道具に比べて、わずか14点に過ぎない。ここではそのうちのいくつかの代表的な記述を確

認したい。

例として、「ジョヴァンニの部屋(camera di Giovanni)」と呼ばれる部屋にあった絵画を取り上げるならば、そこには、ベッドとリネン類そして衣類とともに、次のように記載された絵画のあったことが分かる。

- ・ Una tavola di Nostra Donna in uno tabernacolo con sportelli⁸
(扉付きタベルナーコロに収められた聖母の板絵一つ)
- ・ Uno deschetto da parto di monna Nonina⁹
(ノニーナ夫人の誕生盆一つ)

更に、「コジモの部屋 (camera di Cosimo)」にあった絵画については次のような記載がある。

- ・ Una tavola di Nostra Donna in uno tabernacolo con due sportelli dipinti, con uno vello di seta innanzi¹⁰
(絵の描かれた二枚の扉付きのタベルナーコロに修められた聖母の板絵一つ。前方に絹のヴェールを伴う)
- ・ Una tavoluzza in che è dipinto uno Crucifisso¹¹
(磔刑の描かれた大きな板絵一つ)

ここで注目されるのは、14点中2点を除いた絵画・彫刻の主題が全てキリスト教の聖人像や物語だということである。例外の2点とは、「ジョヴァンニの部屋」にもあった「誕生盆 (deschetto da parto/ desco da parto)」と呼ばれるもので、これは円形の盆状のものに出産の場面や子供の絵を描き、出産前の女性に贈られることが慣習となっていた。そこに描かれた図像は、出産を無事に済ませ、元気な子供を産むための、いわばイメージ・トレーニングのような役割を持つと考えられていたことが指摘されている¹²。従って、1417年の時点でメディチ邸内にあった絵画・彫刻は、ほぼ全てのものが、宗教画像として各々の部屋に存在していたことが分かる。上に引用した文章に登場する「タベルナーコロ (tabernacolo)」とは、元来、『旧約聖書』に登場する「モーセの十戒」の石板を入れた聖櫃が置かれていた「幕屋」を意味していたが、14・15世紀のイタリアでは、主に宗教画や宗教彫刻を安置する容器のことを指すようになっていた。それらはしばしば扉やカーテンを伴い、内部の宗教画像(最も多いのは聖母を表わしたもの)を必要に応じて開いて見せる役割を果たしていた¹³。ヴィクター・シュミットによれば、これらの記述に類似する作品群は、既に14世紀には、商人を通じて人々に購買され、邸内の寝室や

小礼拝堂などに設置されるようになっていたことが分かる。更に、当時の人々が邸宅内の個人部屋や礼拝堂で祈祷を行う時に、こうした宗教画像の前に跪く習慣があったことを示す同時代の図像も数多く残っている(図2・3)。つまりそれらの画像は、当時の人々が祈祷の際に行っていた、キリストや聖母の姿を想起する観想を助ける「祈念図像 (devotional image)」として、部屋に設置されていたのである。残念ながら、旧メディチ邸内にあったこれらの作品を現存する作品に同定することはできない。それは、財産目録における記述が、それらの絵画・彫刻が聖母や磔刑のキリストを描いた板絵であることを示す程度の簡略なものに過ぎないことに由来する。しかし、いずれにせよ、それらが、前世紀から続く宗教的機能を備えた「祈念図像」として各部屋に存在していたことは、現存する様々な作品や記録から確かであろう。

3 「書齋」に集められた絵画：祈念図像から蒐集対象としての絵画へ

ここで、1417年の財産目録に記載された大部分が「祈念図像」と考えられる絵画のうち、二点の例外と捉え得る作例を紹介したい。それらは「コジモの書齋 (scriptorio di Cosimo)」にあった二点の絵画である。15世紀のイタリアにおける貴族の邸内の書齋は、様々な書籍を保管するのみならず、世紀後半になるにつれて、数々の宝物品を陳列する場所となっていた。1417年の時点での「コジモの書齋」にあったものとして記載されているのは、大部分が、古代の哲学者や中世の神学者たちによる著作、そしてペトラルカによる詩などの写本のみであるが、後で確認する1492年の財産目録の記載からは、15世紀末の「書齋」には、古代遺物や珍品貴品といった多くの宝物品が陳列されていたことが分かる。

ところで、「コジモの書齋」にあった二点の絵画についての記載は、先に紹介した絵画のそれとはやや異なっている。

- ・ Una tavola con figura di Nostra Donna e altre figure, antica
(聖母と他の人物たちを伴う板絵一つ。古い)
- ・ Uno quadro di tavola in ch'è dipinto la Passione¹⁵
(受難の描かれた四角い板絵一つ)

下線を引いた部分に注目すると分かるように、これら二点の絵画は、いずれも「古い」や「四角い」とい

た、他の部屋の作品記述には見られないような表現を伴っており、それらは、絵画を「祈念図像」としてのみ捉えているわけではない、新たな付加価値を示唆しているのではないだろうか。

ところで、15世紀に作成されたメディチ本家の四点の財産目録のうち、1456年作成の目録には絵画についての記載が無い。一方、1465年に作成されたピエロの所有する私財を部屋毎にではなくジャンル毎に記載した財産目録には、古代のメダルおよびカメオのコレクションと同列のジャンルとして10枚のギリシア製板絵(内7点はモザイク画)が列挙されている。その記載は次のようなものである。

- ・ Una tavola greca di musaico con santo Iohanni Baptista intero ornate d'ariento f. 20

(銀による装飾を施され、洗礼者ヨハネの全身像を伴うモザイクによるギリシア製板絵一つ。20フィオーリーニ)

- ・ Una tavola greca con una Nostra Donna ornate d'ariento f. 35

(銀による装飾を施された、聖母を伴うギリシア製板絵一つ。35フィオーリーニ)

- ・ Una tavola greca con Nostro Signore dipinto ornate d'ariento f. 40¹⁶

(銀による装飾を施され、神の描かれたギリシア製板絵一つ。40フィオーリーニ)

これらの作品は全て、ギリシアという遠隔の地で、多くは象牙やモザイク、銀といった高価な材料を用いて制作されたものであり、こうした特殊性がこれらの絵画を他の高価な宝物品と同価値のものとしていることが窺える。更に、これらの作品は、1492年の財産目録中の、「書齋」に集められた様々な宝飾品やその他の絵画とともに再度記載されていることから、メディチ家の宝物品コレクションの一部として受継がれていったものと考えられる。

1417年に記載された旧メディチ邸の「書齋」にあった二点の絵画が、新築されたメディチ邸内の新たな「書齋」に受継がれたかどうかは確認できない。しかしながら、15世紀半ば以降にメディチ邸内の「書齋」に集められ絵画の性質を考慮するならば、先に、これら2点の作品記述のうちに確認した、特に「古い」というような付加表現は、これらの絵画が、宗教的機能を持つものとしてのみならず、宝物品に類するものとして蒐集の対象となっていた可能性を示唆しているよ

うに思われる。

4 1492年の財産目録における絵画について

(1)「書齋 (schrittoio)」に集められた絵画

前章で確認したように、1465年に作成されたピエロ・デ・メディチの財産目録に登場する10枚のギリシア製小板(モザイク画・板絵状のものなど)は、1492年のロレンツォ・デ・メディチの死に際して作成された財産目録にも記載され、「書齋」に集められていたことが分かるものである。この「書齋」は、1457年に完成したメディチ邸の二階に設けられた部屋であり、数々の古代遺物や宝飾品を陳列していたことから、メディチ家の美術コレクション研究において注目を集めてきた。ピエロの後を継いだロレンツォは、ミラノ公フランチェスコ・ディ・スフォルツァやマントヴァ侯フランチェスコ・ゴンザーガなどの要人が彼の館を訪ねた際に、ロレンツォと同じく熱心な美術品の類の蒐集家でもあった彼らに、この「書齋」の陳列した品々を見せていたことが確認されている¹⁷。つまりこの時点で「書齋」に集められていた品々は、祈りや日常生活の様々な事柄から切り放された、いわば観賞の対象としての展示物であったことが分かるのである。

1492年作成の財産目録における「書齋」の品々の記載の筆頭に挙げられているのは、ダイヤモンドや紅玉髓などの宝石類製の容器や水差しである¹⁸。こうした品々は1465年の財産目録に記載されていることから、これらもまた早い時期から蒐集対象であったことが窺われる。しかしながら1492年の時点で興味深いのは、ピエロの息子であるロレンツォがとりわけ好んで蒐集したことが確認されている古代の美術品と考えられる陳列品が増えていることである。そして、そうした類のものは他の陳列品に比べて、算定されている値段も破格に高価である。例えば、古代の神話に登場するメドゥーサの頭部が表わされていた紅瑪瑙と玉髓、そして瑪瑙を使って作られた深皿には、10000フィオーリーニの値が付けられているが、ダイヤモンド製の容器に付けられた値である2000フィオーリーニと比べるならば、これが極めて大きな価値を持つものと捉えられていたことが分かる¹⁹。また、古代のカメオやメダルの数が以前の財産目録におけるよりもはるかに増えており、ロレンツォが熱心に古代に関連する美術品を蒐集していたことを示している。ロレンツォがこうした古代遺物に彫られたイメージや中庭に集めた古代彫刻を同時代の画家や彫刻家に解放し、そこで用いられてい

た技法を再興して新たな作品を作らせたりするなど、そこに集められた蒐集品を新たな創造活動を促すものとしても利用していたことはよく知られている²⁰。

ところで、「書齋」に集められた古代遺物や宝飾品が膨大な数に昇るのに対して、同じ空間に陳列されていた絵画はわずかに17点とその数はきわめて少ない。すなわち、他の蒐集品と同価値のものとしてそこに陳列されていた絵画の数は決して多くないのである。ここでは、これら17点の絵画作品の特徴について考えてみたい。

これらの作品には、前章でも紹介したギリシア製のモザイク画や絵画、更には14世紀前半に活躍したジョットの作品のように古い絵画、また、フィレンツェからは遠く離れた北イタリアの諸都市で活躍したスクアルチオーネのような画家、更には、アルプスを越えたフランドル地方で活躍したヤン・ファン・エイクなどの画家による絵画が含まれている。以下に、いくつかの作品の記載例を挙げる。

- ・ Un' altra tavoletta maggiore, dentrovi una figura di san Giovanni Battista, da mezzo in su chon isghuancio e fregiatura d'ariento traforato e a lettere greche chon 10 chompassi di meze figure di musaicho f. 80²¹

(他のやや大きめな小板絵一枚。そこには、面髻を伴う洗礼者ヨハネの上半身が表わされている。銀による葉飾りとギリシア文字で周囲を縁取られ、モザイクによる10人の嘆き悲しむ人物の半身像を伴う。80フィオーリーニ)

- ・ Una tavoletta di br. 3/4 di pittura chon una storia rispositione di Cristo di croce con nove figure di mano di Giotto f. 10²²

(長さ3/4ブラッチャの小板絵一枚。ジョットの手になるキリストの十字架降下の物語と9人の人物が描かれている。10フィオーリーニ)

- ・ Una tavoletta in una chassetta, dipintovi su una Giudetta chon la testa d' Oloferno e una serva, opera d' Andrea Squarcione f. 25²³

(容器に収められた小さな板絵一枚。ホロフェルネスの首を持つユディトと召使が描かれている。アンドレア・スクアルチオーネの作。25フィオーリーニ)

- ・ Una tavoletta di Fiandra, suvi uno san Girolamo a studio chon uno armarietto di più libri di prospettiva e uno liono a' piedi, opera di maestro Giovanni di Bruggia, cholorita a olio, in una guaina f. 30²⁴

(フランドル製の小板絵一枚(図4)。そこには遠近法に従って描かれたいくつもの本を伴う小さな戸棚のある書齋で、足下にライオンを従えた聖ヒエロニムスがいる。ブリュージュのヨハンネス(ヤン・ファン・エイク)の作品で、油彩。容器に入れられている。30フィオーリーニ)

このように、「書齋」に集められた絵画は、いずれも、遠く離れた地で制作されているか、あるいは古い時代に制作されているなどの、いわば「珍しい」要素を持つものであり、そうした付加価値を持つ絵画が蒐集ひいては観賞の対象であったことが分かる。また、値段に注目するなら、絵画は他の古代遺品や宝飾品に比べて決して高価なものではない。更にその値段は、第一に素材、第二に「遠隔地で制作されている」という珍しさによって判断されているとも考えられるだろう。そしてこうした価値基準は、15世紀のフィレンツェの人々が、絵画に美術品としての側面を明確に見出しはじめていたことを示しているように思われるのである。

(2) その他の部屋に集められた絵画

1457年に完成した新たなメディチ邸(現メディチ・リッカルディ邸)は当初の当主であったコジモをはじめとする家族たちの住まう私邸だけでなく、結婚式のような記念行事が行われる場でもあり、また、特に地階はメディチ銀行に関する仕事も遂行される、半ば公的な性質を併せ持つ三階建ての建物だった²⁵。そこには、「広間(sala)」に当たる部屋が各階に一つずつ、他に、控え室(anticamera)や入り口部屋、更には屋根裏部屋を伴う「個室(camera)」が、寝室兼仕事場を兼ねた空間として21部屋、その他、礼拝堂、台所などが含まれていた。これらの部屋の中で、最も多く美術品が設置されていたのは、メディチ家の主要な人物が使用していた「個室」だった。確かに、このような状況は、14世紀初頭の場合と共通しているが、大きく異なるのは、それらの部屋に設置されていたのが、宗教画像を主体とする作品だけではなく、世俗画や裸体彫像、肖像画・肖像彫刻、地図などが混在していた点である。

例えば、二階にあった「ロレンツォの大きな部屋(chamera grande di Lorenzo)」にあった作品の記載を見るならば、そこには次のような絵画・彫刻が設置されていたことが分かる。

・ Uno colmo di legname intagliato e messo d' oro, alto br. 4 1/2, largho br. 2 1/2, entrovi una Nostra Donna di marmo f. 25²⁶

(鍍金された、寄木細工による木製のコルモ²⁷一つ。高さ4と1/2ブラッチャ、幅2と1/2ブラッチャ。大理石製の聖母像を伴う。25フィオーリーニ)

・ Dua quadri, uno picholo e uno grande, entrovi teste dua di Christo, di musaicho f.-

(キリストの頭部の表された四角いモザイク画二枚。一枚は小さく、一枚は大きい。一フィオーリーニ)

・ Tre quadri di musaicho, entrovi una testa d' uno san Pietro e di uno sancto Paulo e una d' uno sancto Lorenzo f.-

(四角いモザイク画三枚。一枚には聖ペテロの頭部が、もう一枚には聖パウロの頭部が、そして残る一枚には聖ラウレンティウスの頭部が表わされている。一フィオーリーニ)

・ Uno quadro di marmo, chornicie di legname atorno, entrovi di mezzo rilievo una Accensione di mano di Donato f. 15

(四角い大理石板一枚。木製の額縁付き。キリストの昇天が浮彫られている。ドナテッロの作。15フィオーリーニ)

・ Una testa di marmo sopra l' archo dell' uscio di chamera, ritratto al natural mona Lucretia f. 10

(部屋の出入口のアーチの上の大理石製胸像一つ。モンナ・ルクレツィアの肖像。10フィオーリーニ)

・ Una testa di marmo sopra l' uscio dell' antichamera, della 'mprompta di Piero di Cosimo f. 12

(控え部屋への出口の上の大石製胸像一つ。ピエロ・ディ・コジモの肖像。12フィオーリーニ)

・ Uno tondo di musaicho, entrovi la 'mprompta di Giuliano di Lorenzo f.-

(円いモザイク画一枚。ジュリアーノ・ディ・ロレンツォの肖像が表わされている。一フィオーリーニ)

・ Uno quadro di musaicho, entrovi una testa di giovane f.-

(四角いモザイク画一枚。若者の頭部が表わされている。一フィオーリーニ)

・ Uno descho tondo da parto, dipintovi il Trionfo della Fama f. 10

(丸いデスコ・ダ・パルト一つ (図5)。名声の勝利が描かれている。10フィオーリーニ)

・ Uno colmo di br. 3 lungho, dipintovi una Terrasanta f. 6

(長さ3ブラッチャのコルモ一つ。聖地が描かれている。6フィオーリーニ)

・ Uno colmo di br. 2 1/2, dipintovi la Spagna f. 8

(2と1/2ブラッチャのコルモ一つ。スペインが描かれている。8フィオーリーニ)

・ Una figura gnuda, ritta, chon uno bastone, di marmo, di tutto rilievo f.-

(大理石製の直立した丸彫り裸体像一体。杖を手にしている。一フィオーリーニ)

・ Un' altra fighuretta di marmo, di tutto rilievo, meza a sedere f. 13

(丸彫りの大理石製人物像一体。半ば座っている。13フィオーリーニ)

・ Uno panno di Fiandra, di br. 5 1/2 lungho e alto br. 4, dipintovi archi, paesi e figure f. 25

(フランドル製の布絵一枚。長さ5と1/2、高さ4ブラッチャ。アーチ、村落および人物たちが描かれている。25フィオーリーニ)

ここでは、キリスト教主題の作品が7点、肖像画や「デスコ・ダ・パルト」などの家族に関係すると考えられる作品が5点、地図の類が2点、そして更に、おそらく鑑賞のために好まれたと考えられるような世俗的主题を表わす絵画1点と古代彫刻に想を得たと思われる彫刻2点が混在していたことが分かるが、同じ傾向は、1492年の財産目録に記載された他の多くの部屋にも当てはまる。このような状況は、先に1417年の財産目録から確認した15世紀はじめのメディチ邸には見られなかったものであることから、一世紀近くを経た15世紀末のフィレンツェ貴族の邸内における絵画・彫刻の享受のあり方の変化を示しているとも考えられるだろう。すなわちこうした多種多様な作品群の共存は、メディチ邸の様々な「個室」でも、「書斎」の場合と同様に、絵画・彫刻を宗教的機能や日常的な機能を伴うものとしてだけではなく、目で見て楽しむものとしても接するようになってきたことを示唆しているのではないだろうか。とりわけ、アルプス以北のフランドル地方というフィレンツェからは遠く離れた土地で制作された世俗的主题を表わす絵画が、1点ではあるものの、共存していることは、「書斎」においても同種の絵画が蒐集・観賞の対象として存在していたことを思い出させる点で興味深い。また、2点の大理石製人物像の彫刻は、15世紀のイタリアで古代彫刻の影響を受けて制作された数々の裸体彫像に属するものと考えられ、古代芸術の蒐集と同時代の芸術制作へのその

利用に尽力した芸術のパトロンとしてのロレンツォ・デ・メディチの存在を示唆している。更に、こうした作品と並んで同じ部屋に設置されていた7点もの宗教画・宗教彫刻は、一部屋に置かれている作品数が15世紀はじめよりもはるかに多くなっており、また、「書斎」に蒐集されていた絵画と同様にモザイクのような貴石を使って作られたものや、ドナテッロという15世紀のフィレンツェにおいて人気を博した彫刻家が制作したものが含まれていることが分かる。このような事実、これらの作品が必ずしも「祈念図像 (devotional image)」としてだけでなく、観賞対象として同じ空間に存在していたことを示しているとも捉えられるだろう²⁸。従って、15世紀末のメディチ邸内の各個室に設置された絵画・彫刻群は、たとえそれが「祈念図像」としての機能を併せ持つものであったとしても、「書斎」における絵画・彫刻と同様に、蒐集と観賞の対象としてそこに存在していたと考えられるのである。

5 まとめと今後の研究課題

これまでの考察から、15世紀のフィレンツェの個人邸宅における絵画は、世紀前半には祈りの行為に必要とされた宗教的機能を持つ「祈念図像」として存在するものが専らであったのに対し、世紀末にはそこに蒐集・観賞の対象という新たな価値が見出されるようになっていたことは確かであろう。しかしながら、メディチ邸に集められた絵画の役割は、必ずしも上記の二点に限られるものではない。確かに、1492年の時点で確認されるメディチ邸内の多くの「個室 (camera)」に設置される絵画には、部屋毎に主題による統一性が見られないことから、そこにおいて観賞対象としてそれらを味わうことのために存在していたように思われる。その一方で、設置されている絵画に明らかな主題的統一と政治的メッセージが指摘される部屋があることもまた事実である。例えば、先行研究に関連して紹介したように、二階にあった「広間 (sala)」に設置されていた、古代の英雄ヘラクレスの偉業をテーマとする絵画群は、同じ英雄を町の守護者として位置付けていたフィレンツェにおける、メディチ家の政治的実権を内外の要人たちに示す意図を持っていたことが指摘されている。筆者は、おそらくは同様の意図をもってロレンツォ・デ・メディチが集めた絵画を展示していた部屋が少なくとももう一部屋あったのではないかと考えている。それは一階の「ロレンツォの個室」と

呼ばれた部屋にあたるものであるが、ここには、1480年代にロレンツォが蒐集したパオロ・ウッチェッロ作《サン・ロマーノの戦い》の三部作を絵画群が存在した。今後は、これらの絵画群に見出される共通テーマについて考察を深め、1480年代のロレンツォ・デ・メディチの政治的状況を考慮して、これらの作品がこの空間に集められた意図を検討したい。その上で、15世紀における絵画受容のより複雑なあり方——作品と観者との関係——を指摘したいと考えている。

<註>

- 1 コジモ・デ・メディチおよびその息子のピエロ・デ・メディチによるパトロネージ、およびその宗教的・政治的利用に関する近年の代表的文献としては以下のものが挙げられる。*Piero de' Medici "il Gottoso" (1416-1469)*, eds., Andreas BEYER - Bruce, BOUCHER, Berlin, 1993; *The Early Medici and Their Artists*, ed. Francis Ames-Lewis, London, 1995; Dale KENT, *Cosimo de' Medici and the Florentine Renaissance: the patron's oeuvre*, New Haven - London, 2000.
- 2 美術品蒐集家としてのメディチ家の側面に焦点をあてた研究としては、ピエロの息子ロレンツォに関するものが多い。*Per bellezze, per studil, per piacere': Lorenzo il Magnifico e gli spazi dell'arte*, ed. Franco BORSI, Firenze, 1991; Christopher B. FULTON, *An Earthly Paradise: the Medici, their Collection and the Foundations of Modern Art*, Citta di Castello, 2006; Laurie FUSCO - Gino CORTI, *Lorenzo de' Medici: Collector and Antiquarian*, Cambridge, 2006.
- 3 これらの財産目録はいずれもフィレンツェの国立古文書館に保管されるものであるが、以下の文献に集録されている。*Libro d'Inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, eds. Marco SPALLANZANI - Giovanna Gaeta BERTELÀ, Firenze, 1992; *Inventari medicei 1417-1465, Giovanni di Bicci, Cosimo e Lorenzo di Giovanni, Piero di Cosimo*, ed. Marco SPALLANZANI, Firenze, 1996.
- 4 *The Chapel of the Magi: Benozzo Gozzoli's Frescoes in the Palazzo Medici-Riccardi Florence*, ed. Cristina ACCIDINI LUCHINAT, London - New York, 1994; Dale KENT, op. cit., pp. 305-328.
- 5 これらの絵画群は現存しないが、1492年作成のメディチ家財産目録において作品が記載されていることから、その図像プログラムを再構成することは可能である。これらの作品についての研究としては以下のものが挙げられる。Carlo DEL BRAVO, "Etica o poesia, e mecenatismo: Cosimo il Vecchio, Lorenzo,

- e alcuni dipinti” , in *Gli Uffizi: quattro secoli di una galleria, Atti del Convegno Internazionale di Studi, Firenze, 20-24 settembre 1982*, ed. Paola Barocchi-Giovanna Ragionieri, I, Firenze, 1983, pp. 201-216; Wolferger A. BULST, “Die sala grande des Palazzo Medici in Florenz: Rekonstruktion und Bedeutung” , in *Piero de’ Medici “il Gottoso”*, pp. 89-127.
- 6 Christopher B. FULTON, *op. cit.*; Laurie FUSCO – Gino CORTI, *op. cit.*.
- 7 ただし、デル・ブラーヴォは、1492年の財産目録から確認される「大広間」および「ロレンツォの部屋」にあった絵画群をコジモ・デ・メディチが注文したものと仮定し、それらが政治的な道徳を説く目的で制作された可能性を論じている。しかしながら近年の研究では、「大広間」の絵画群は息子のピエロに関連付けられ、更に、「ロレンツォの部屋」の絵画群については、その一部であるパオロ・ウッチェッロ作《サン・ロマーノの戦い》の三部作が、彼の孫にあたるロレンツォによって新たに蒐集されたものであることが明らかとなった。Maria Grazia Ciardi Dupré DAL POGGETTO, “I dipinti di Palazzo Medici nell’ inventario di Simone di Stagio delle Pozze: Problemi di committenza e di arredo” , in *La Toscana al tempo di Lorenzo il Magnifico: Politica Economia Cultura Arte, Convegno di Studi promosso dalle Università di Firenze, Pisa e Siena, 5-8 novembre 1992*, Pisa, 1996, pp. 131-162; Carlo DEL BRAVO, *op. cit.*; Francesco CAGLIOTI, “Nouveautés sur la ‘Bataille de San Romano’ de Paolo Uccello”, *Revue du Louvre*, *LL*, 4, 2001, pp. 37-54.
- 8 *Inventari medicei 1417-1465*, p. 4.
- 9 *Ibid.*, p. 5.
- 10 *Ibid.*, p. 11.
- 11 *Ibid.*, p. 12.
- 12 Jaqueline Marie MUSACCHIO, *The Art and Ritual of Childbirth in Renaissance Italy*, New Haven, 1999.
- 13 Cristina ACCIDINI LUCHINAT, “I tabernacoli, architetture senza architetti”, in *Arte storica e devozione: Tabernacoli da conservare; Quaderini dell’Ufficio Restauri della Soprintendenza per i Beni Artistici e Storici di Firenze e Pistoia 3*, Firenze, 1992, pp. 15-22.
- 14 V. M. SCHMIDT, *Painted Piety: Panel Paintings for Personal Devotion in Tuscany, 1250-1400*, Firenze, 2005, pp. 81-106; Ronald. G. KECKS, *Madonna und Kind: Das häusliche Andachtsbild im Florenz des 15. Jahrhunderts*, Berlin, 1988.
- 15 *Inventari medicei 1417-1465*, p. 20.
- 16 *Ibid.*, p. 143.
- 17 Christopher B. FULTON. *op. cit.*, p. 195.
- 18 「書齋」に陳列されていた品々の記載は以下を参照。*Libro d’Inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, pp. 34-56.
- 19 これらの作品の記載内容は次のとおり。“Una schodella di sardonio e chalcidonio e aghata, entrovi più figure et di fuori una testa di Medusa, pesa lib. 2 once 6 f. 10000 (紅瑪瑙と玉髓、瑪瑙で作られた皿一枚。中に、何人かの人物とメドゥーサの頭部が表わされている。重さ2リップレ6オンス。10000フィオーリーニ)”, “Uno rinfrescatoio di diaspro grande chon dua manichi fornito d’ argento dorato, pesa lib. 13 1/2, vale f. 2000 (大きなダイヤモンド製の容器一つ。鍍金のほどこされた銀製の柄を伴う。重さ13半リップレ。2000フィオーリーニ)” : *Ibid.*, pp. 35-36.
- 20 Laurie FUSCO – Gino CORTI. *op. cit.*, pp. 136-145.
- 21 *Libro d’Inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, p. 47.
- 22 *Ibid.*, p. 48. ブラッチャとは15世紀のフィレンツェで用いられていた長さの単位で、1ブラッチャは約60cmに相当する。
- 23 *Ibid.*, p. 51.
- 24 *Ibid.*, p. 52.
- 25 メディチ・リッカルディ邸については以下の文献を参照。*Il Palazzo Medici Riccardi di Firenze*, eds. Giovanni CHERUBINI – Giovanni FANELLI, Firenze, 1990.
- 26 ここに挙げた記載例は以下を参照。*Libro d’Inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico*, pp. 27-28.
- 27 「コルモ (colmo)」とは、上部が切り妻形か半月形の板の形のことを指す。
- 28 フルトンもまた、「個室」における絵画群に観賞対象としての役割を見出しているが、個室における宗教画から従来の宗教的機能が完全に消失したとする根拠はなく、従って筆者は、そうした絵画や彫刻には、宗教的機能と観賞機能との二つが共存していたと捉えるほうがより適切ではないかと考える。Christopher B. FULTON. *op. cit.*, p. 173.

(2009. 8. 10 受理)



図1 ミケロツォ、パラツツォ・メディチ・リッカルディ外観、1446-57年。



図2 サン・マルティーノ・メンソラの画家《跪いて祈るハンガリーの聖ヘンドリクスとその妻》(祭壇画プレデッラの一部)、1391年、フィレンツェ、サン・マルティーノ・メンソラ聖堂。



図3 ヤコポ・ディ・チョーネ《聖母子と二人の寄進者》1360-70年頃、46×34.5cm、フィレンツェ、アカデミア美術館。



図4 ヤン・ファン・エイク《書斎の聖ヒエロニムス》1442年頃、
20.5×13.3cm、デトロイト美術研究所。



図5 ロ・スケッチャ、「ロレンツォ・デ・メディチの誕生盆」(表：名声の勝利)、1449年、直径92.7cm、ニューヨーク、メトロポリタン美術館。